

「甘え」、「甘える」、「甘えさせる」とは何か？ ：素朴概念の分析を通して

高松, 雄太
九州大学大学院人間環境学府

加藤, 和生
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/859>

出版情報：九州大学心理学研究. 2, pp.159-167, 2001-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

「甘え」、「甘える」、「甘えさせる」とは何か？

—素朴概念の分析を通して—

高松 雄太 九州大学大学院人間環境学府
加藤 和生 九州大学大学院人間環境学研究院

What do the words “amae,” “amaeru,” and “amaesaseru” imply to lay people?

—Content analysis of their descriptions—

Yuta Takamatsu (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

Kazuo Kato (*Faculty of human-environment studies, Kyushu university*)

This study was conducted to investigate what layperson's concepts of “amae,” “amaeru,” and “amaesaseru.” 105 persons (30 males and 75 females, $M=27.7$, $S=14.0$) were asked to describe in the open-ended format what these concepts imply to them. Main findings were as follows: (a) In layperson's concepts of “amae,” the frequently described categories are “laziness” (16.5%), “having someone do what one doesn't want to” (12.6%). In layperson's concepts of “amaeru,” the frequently described categories are “acting selfish” (16.5%), “having someone do what one doesn't want to” (12.6%). (b) In layperson's concepts of “amaesaseru,” the frequently described categories are “granting whatever a person wishes” (20.2%), “giving psychological supports” (12.6%).

Keywords: culture, amae, attachment, layperson's concept, content analysis

問題と目的

甘えは、英語には的確な訳語を見いだすことのできない日本語特有の言葉であり、これまで多くの研究者の関心を集めてきている（土居, 1971; 木村, 1972; 原・我妻, 1974; Morshbach & Tyler, 1986; Markus & Kitayama, 1991; 手塚, 1993; Kato, 1995）。また「甘え」は、心理学において、精神分析や臨床心理学, 児童心理学で、患者や問題児の態度や行動を理解するのに有用な記述概念や、説明概念とされてきている（cf. 土居, 1960, 1968; 菅野, 1982 手塚, 1993; 竹友, 1988, 1989, 1999; 岡野, 1999; 坂本, 1997）。

そこでまず、心理学者や精神科医たちがこれまでに「甘え」、「甘える」、「甘えさせる」をどのように捉えてきたかを概観する。Table 1 は、彼らの概念規定をまとめたものである。それぞれの概念規定は、大きく分けて二つの特徴があると思われる。まず一つ目は、個人の欲求、願望、期待など、個人内の状態に最も焦点を当てたものである。例えば土居（1956, 1967）は、「甘え」が対象関係を成立させる欲求、すなわち依存欲求や一体化欲求であるとした。その後、土居（1981）は、「甘え」が相手との接近への願望を示す欲望的感情であると言い換えた。例えば「彼は甘えている」という場合、まず「甘え」は観察された行動（例えば、なれなれしい態度や、気を引くような口調など）を指しているが、甘えはこのように

観察された行動自体ではなく、その行動の奥にある感情を意味しているとされる。また、この接近を求める内的な欲求や願望は、土居自身や他の心理学者によってより具体的に述べられている。まず、土居の考える依存欲求に近いものでは、自己中心的な要求を受け入れて欲しいという願望（Okonogi, 1992）や、まわりの環境や相手をコントロールしたいという願望（山口, 1999）がある。また、一体化欲求に近いものでは、愛されたいという願望（原・我妻, 1974）、自分を受け入れて欲しいという欲求（手塚, 1993）、願望（山口, 1999）がある。

二つ目の特徴は、「甘え」をある種のコミュニケーションの仕方と捉えるものである。竹友（1988）は、土居の「甘え」が個人内の感情経験に限定され過ぎており、辞書の定義や日常の使用法にもとづくなら「甘え」がある種のコミュニケーションの仕方を指していると批判した。そして、竹友（1988）は、「甘え」とは、相手との同意のもとに、年齢や置かれている状況を考えると当然自分ですべきことをしなかったり、すべきでないことをすることであるとした。この他の概念規定では、小此木（1969）が、「健常者の健康な「甘え」とは、自分の依存が、同時に相手の喜びであるとの期待とその期待の確認を含む相互的な（reciprocal）対人交流様式である」としている。

しかし、こうした研究のほとんどは、Kato（1995）が指摘しているように、その多くが臨床的・日常的観察に

Table 1
心理学者が考える、「甘え」、「甘える」、「甘えさせる」概念

A. 専門家が考える、「甘え」、「甘える」とは？

1. 個人の欲求, 願望, 期待

【広義】依存欲求・一体感を求める欲求(土居, 1956, 1967)

相手との接近への願望を示す欲望的感情(土居, 1988)

【狭義】①自己中心的な要求を受け入れて欲しいという期待・願望

：他の人に自分のわがままな要求, 自己中心的な要求, 権利への要求を認めてもらおう, あるいは許してもらおうという期待(Okonogi, 1992)

②自分の周りの環境や相手を自分にとって快適なようにコントロールしたいという願望(山口, 1999).

③相手に愛されたいという欲求, 願望

：受け身的に愛されたい欲求(土居, 1965)

：「甘える」は受け入れられ愛されるという受動的な状態に, 能動的に入っていくことを示す(原・我妻, 1974).

④欠点や弱みも含めありのままの自分を受け入れて欲しいという欲求(手塚, 1988), 願望(山口, 1999)

：相手から何らかの感情的サポートを受けることを目的として, 自分の愛する者や好意を持つ相手に自分の欠点や行動を無条件に受け入れてもらいと願う気持ちから生じるもの(山口, 1999).

2. ある種のコミュニケーションの仕方

①相手との親密性を保つため, または相手を喜ばせたり満足させるため, 相手に信頼や愛情を示すこと

：甘えることは積極的な愛情や信頼の表示であり, 親密性を保つ(土居, 1971; 竹友, 1988)

：相手にわざと依存的な態度をとることで, 相手を喜ばせたり満足させる(竹友, 1988; 岡野, 1999)

：自分の依存が, 同時に相手の喜びであるとの期待とその期待の確認を含む相互的な対人交流様式(小此木, 1969, Maruta, 1992)

②相手の愛情を確認すること

：これだけ無理難題を吹きかけても, この人は受けれてくれるだろうかと試す(西平, 1982).

③相手を利用して自分の欲求の満足や願望の実現をはかること(土居, 1965)

④相手の同意のもと, 一時的に, 常識では自分でなすべきことをしなかったり, なすべきでないことをすること

：関わり合う2人の同意のもとに一時的に, その人の年齢や置かれた状況などから, 当然その人が自分でなすべきことをしなかったり, なすべきでないことをすること(竹友, 1988, 1989, 1999)

B. 心理学者が考える、「甘えさせる」とは？ → まとまった論考が少ない

1. 個人の欲求

自分の「甘え」の欲求を代償的に満足させること(原・我妻, 1974).

2. 対人相互作用のプロセス

①人間関係を滑らかにすること(原・我妻, 1974; Kato, 1995).

②相手の傷ついた心を癒すこと(原・我妻, 1974; Kato, 1995).

③相手に憩いの場を提供すること(原・我妻, 1974; Kato, 1995).

もとづいてなされたものである。そのため、人が実際に甘えについていかなる知識表象をもっているのか、すなわち「甘え」の素朴概念がそもそもどのようなものなのかやその意味範囲・概念構造を調査した研究はほとんどない（杉本・ロス, 1982; Kato, 1995）。そのため、「甘え」の現象に含まれる範囲や、その他の類似現象との共通性や差異の検討が不十分であり（長山, 1998, 1999）、「甘え」概念は曖昧なまま用いられている（小此木, 1968; 竹友, 1988）。また、土居（1971）は、「甘え」概念が、日本人であれば誰でも同じように理解されているほど「自明の」概念と主張しているが、果たして本当であろうか。

本調査ではこうした問題を踏まえ、一般人に甘えの属性や特徴を自由記述してもらい、その具体的な回答をカテゴリー化することで「甘え」の素朴概念とはどのようなものであるかを明確化する。さらに、それと心理学者の概念規定との相違を明確化する。また、これまでの理論的研究では、「甘え」と「甘える」が区別されることなく混在して用いられてきている。しかし、「甘え」は名詞であり「甘える」が動詞であるという違いのために、両概念には差異がある可能性があるためその点もあわせて調査する。

先行研究

Kato（1995）は、人が他者との甘え交流をすることを通して「甘え」行動・交流に関する内的作業モデルが形成され、それが現在の甘え行動・交流およびその体験（認知・評価・情動）を規定すると考えた。さらに、その過程を従来の理論化を統合する形で理論化を試みた。その研究の中で、Kato（1995, Study 1, Analysis 1）は、土居の甘えの自明性に対して疑問をもち、「甘え」の素朴概念の分析をおこなった。その際、①甘えや甘えのやりとりに含まれる要素を抽出し、②それを「甘え」と一般には同義語のように使われがちな概念である「依存」と比較対象することで「甘え」概念の特徴を取り出そうとした。そのために、被験者（看護学校生 100 名、25-55 歳）に「甘えとはどういうことか、また甘えるとはどうすることか」、また「それは依存とどのように違うのか」について自由記述をもとめた。

その結果、被験者は「甘え」について（A は甘える人、B は甘えさせる人を指す）

- ① A と B の双方向のコミュニケーションであり、② 甘え行動の目的は B に依存する、または援助を求める、サポートを求める、B とふざける、または時には B に自己主張をすることによって、間接的または直接的に相互の一体感の喜びを経験することであり、③ A が甘えるとき、B が受け入れてくれるだろう、または受け入れるべきだという期待を持ち、④ 相互に甘えのやりとりを楽しむためには（依存とは異なり）、自分の甘え行動が B の受容力の限界を越えないようにするた

め、自分自身や B の行動、感情、立場等をモニターしたり、自分自身の行動を自制できること（言いかえると、自分を持つこと）が不可欠であると考えていた（Kato, 1995, pp.73-74）。

しかし Kato の研究では、「甘え」と「依存」を並列して被験者に回答を求めていたために、被験者が「依存」との差異を意識しながら「甘え」についての考えを記述した可能性がある。すなわち被験者は対立する概念として「依存」を頭に浮かべながら、それとの関係で成立する「甘え」概念の属性や特徴を記述したかもしれない。そのため「甘え」は、本質的には広い意味で捉えられている概念である可能性があるにもかかわらず、「依存」との差異を強調しているところだけが取り出されてしまった可能性がある。

一方、Kato の研究から「甘え」のやりとりが双方向のプロセスであるということが明らかにされた。とするならば、「甘える」方向だけでなく、「甘えさせる」に関する素朴概念の分析も必要であるかもしれない。しかしこれまでの論考では、「甘えさせる」に関するまとまったものはほとんどない。唯一の例外は、原ら（1974）の一般書の中の記述である。彼らによると「甘えさせる」とは、自らがして欲しいことやして欲しかったことを相手に施すことで、自分の甘えの欲求を代償的に満足させることとした。より具体的には、人間関係を滑らかにすることや相手の傷ついた心を癒すこと、相手に憩いの場を提供することとしている。また Kato（1995, Study 1・Analysis 2）は、また甘えの良い面・悪い面に関する分析を行っているが、「甘え」の甘えさせる側に及ぼす良い影響に関するカテゴリーは、原らのものとかかなり類似したものが得られている。しかし、ここでは「甘えさせる」の素朴概念そのものが分析されているわけではない。そこで本調査では「甘えさせる」の素朴概念についてもあわせて調査を行う。

素朴概念を研究することの意義

「甘え」に関してこれまでいろいろの議論がなされ論述がなされているなかで、素朴概念を研究することの有用性とは何なのだろうか。著者たちは、次の二つの理由から素朴概念の分析が重要であると考えている。理由の一つ目は、素朴概念を研究することで、とかく理論にとられがちな心理学者が見落としがちな現象の様々な側面を明らかにできる可能性があるからである（Fehr & Russell, 1991; Kato, 1995）。例えば「愛（love）」の素朴概念研究で、心理学者が主にロマンティックな愛に注目しているのに対して、一般人は家族や友だちへの愛に焦点を当てていることが明らかにされている（Fehr, 1994; Fehr & Russell, 1991）。有用な理論構築において、現象の明確なそして広範囲にわたる記述を欠くことはできない。素朴概念は、心理学者にさらなる調査や理論化への

Table 2
「甘え」：回答者数2名以上のコード

1. 対人欲求(20)	20.6%
1. 人を頼りにしたり、あてにする気持ち(7)	7.2%
2. 人が受容してくれるだろうという期待・安心感(6)	6.2%
・「この人は自分を許してくれるだろう」とか「この人は自分を受け入れてくれるだろう」という期待と安心感(4)	4.1%
・「これくらいは許されるだろう」と考えること(2)	2.1%
3. 人を頼りにする気持ちが強いこと(2)	2.1%
4. わがままな気持ち(5)	5.2%
2. ある種のコミュニケーションの仕方(61)	62.9%
1. 怠惰であること(16)	16.5%
・嫌なことや苦しいことを避けて、楽な方へと逃げようとする(6)	66.2%
・しなければいけないことを後回しにすること(3)	33.1%
・怠けたり、さぼったりすること(3)	33.1%
・心の弱さ(2)	22.1%
・妥協すること(2)	22.1%
2. 自分がしたいことでなければ人に頼ること(10)	7.8%
・自分一人でもできることでも人に頼ること(6)	66.2%
・人に頼ってばかりいること(2)	22.1%
・必要以上に人に頼ること(2)	22.1%
3. 自己開示をすること(8)	8.2%
・自分の本心を人に伝えたり、ありのままの感情を人に見せること(5)	55.2%
・自分の弱いところやだらしな部分を見せること(3)	33.1%
4. 人に頼ること(6)6.2%	
5. わがままを言う・わがままに振る舞うこと(5)	5.2%
・わがままに振る舞うこと(3)	33.1%
・わがままを言うこと(2)	22.1%
6. 人に依存すること(4)	4.1%
7. 人から愛情を受けようとする(4)	4.1%
・相手に想ってもらったり、かわいがってもらうこと(2)	22.1%
・自分の弱さや欠点を愛情で支えてもらうこと(2)	22.1%
8. 一人でできないことを頼ること(2)	2.1%
9. 「相手その人だからできる」ような頼みのこと(2)	2.1%
10. 自分の弱い部分を見せて慰めてもらったり、頼みを聞いてもらうこと(2)	2.1%
11. なれあうこと(2)	2.1%
3. 対人評価(10)	10.3%
1. 物事への取り組みや対人態度が甘いこと(8)	8.2%
・自分に甘いこと(6)	66.2%
・自分の言動や自分の立場に無責任であること(2)	22.1%
2. 幼さが抜け切れてないこと(2)	2.1%

注：回答者数, 97名(男27名;女70名);カッコ内の数字は, 回答者数;総度数91パーセンテージ(%)は, 回答者数全体における回答者数の割合

材料を与えてくれるかもしれない (Kato, 1995)。二つ目の理由は、素朴概念が現在の対人関係や対人行動の認知に影響を与えるというと考えられるからだ (Shaver, Schwartz, Kirson, O'Connor, 1987; Kato, 1995)。例えば甘えのやりとりは、「甘え」についての素朴概念に照らして行われたり、甘えのやりとりを行う際、どのように考え、どのように振る舞うかに影響を与えると考えられる。したがって、「甘え」の素朴概念を分析することで甘えのやりとりを行うときの判断や決定の土台となっている知識や信念にアプローチできる。

方 法

被験者は、105名 (男：30名、女：75名、平均年齢：27.7歳、範囲：16～59歳、SD：14.0歳) であった。「甘

え」についての知識は経験に基づく知識であり、年齢に影響を受けるかもしれない。そこで本調査は、反応の偏りを避けるため、できる限り幅広い年齢層の被験者を対象とした。調査は、1999年7月～10月に質問紙を用いて行われた。質問紙には「あなたは『甘え』（『甘える』『甘えさせる』）とは、それぞれどういうもの、どういうことをすることだと思えますか。」という教示が書かれていた。それぞれの記述のためにB5用紙1枚分（一つの言葉のためにその3分の1）のスペースが与えられた。

結 果

「甘え」の特徴については98名、「甘える」の特徴については99名、「甘えさせる」の特徴については97名が回答した。まず、調査者と心理学を専攻している二人

Table 3
「甘える」：回答者数2名以上のコード

1. 対人欲求(7)	7.4%
1.人に頼りすぎる気持ち(5)	5.3%
・人を頼りにする気持ちが強いこと(3)	3.2%
・自分一人ですることでも、人をあてにする気持ち(2)	2.1%
2.人を頼りにする気持ち(2)	2.1%
2. ある種のコミュニケーションの仕方(66)	69.5%
1.わがままを言う・わがままに振る舞うこと(22)	23.2%
・わがままに振る舞うこと(16)	16.8%
・わがままを言うこと(6)	6.3%
2.自分がしたいことでなければ人に頼ること(12)	12.6%
・自分ですべきことでも人に頼ること(4)	4.2%
・自分一人ですることでも人に頼ること(4)	4.2%
・自分が楽をしたいために人に頼ること(2)	2.1%
・自分一人ではできないことを人に頼ること(2)	2.1%
・自分がやりたくないことを人にしてもらおうこと(2)	2.1%
3.人に頼ること(11)	11.6%
4.人に頼ってばかりいること(6)	6.3%
5.自己開示をすること(4)	4.2%
6.かわいがってもらったり、やさしくしてもらおうこと(3)	3.2%
7.一人でできないことを頼ること(2)	2.1%
8.自分の弱い部分を人に見せたり自分の本心を人に伝えて、頼みを聞いてもらうこと(2)	2.1%
9.人に慰めてもらったり、ホッとさせてもらうこと(2)	2.1%
10.人の好意をずうずうしく受け入れて、それを利用すること(2)	2.1%
3. 態度や行動への評価(2)	2.1%
1.自分の言動や自分の立場に無責任であること(2)	2.1%

注：回答者数、95名 (男28名；女67名)；カッコ内の数字は、回答者数；総度数80パーセンテージ(%)は、回答者数全体における回答者数の割合

の大学院生（以下、実験協力者と呼ぶ）で回答をスクリーニングした。次に、調査者が回答のコード化を行った。原則的には、句点で終わる一つの文を一つのコードとした。しかし、一つの文に二つ以上の特徴が含まれていると判断された場合、それは別の意味的なまとまりとして分けられた（例：「自分以外の人々の好意にすがったり、自分の意志ではやっていけないと分かっていることをする」）。また、回答に二つ以上の文が含まれていても、それらが同じ意味内容であったり、文章全体で一つの意味内容であれば、その回答は一つのコードとした（例：

「甘えさせるとは、例えば自分の子供に対して、自立のさまたげになる行為をする。具体的には、人のものをこわしてしまったりして謝らなかった場合、叱らずにそのままにしたり、朝の挨拶をしなくても怒らないことなどです。」）。その後、実験協力者は全回答の約30%をコード化した。そして、それと調査者のコードとの一致率をみた（一致率は、それぞれ90%以上であった）。その後、調査者は、実験協力者と話し合い、最終的なコードを決定した。コードの総数は、「甘え」が129個（97名が回答；一人平均1.33個）、「甘える」が126個（95名が回

Table 4
「甘えさせる」：回答者数2名以上のコード

1. 対人欲求(7)	7.9%
人に自分を頼りにして欲しいと思うこと(7)	7.9%
2. ある種のコミュニケーションの仕方(75)	84.3%
1.人の願いを何でも聞き入れること(18)	20.2%
・人のわがままを聞き入れること(12)	13.5%
・人の願いを何でも聞くこと(6)	6.7%
2.人に精神的サポートを与えること(18)	20.2%
・人の気持ちを慰めてあげること(6)	6.7%
・悩み事の相談に乗ってあげること(5)	5.6%
・人に優しくすること(4)	4.5%
・人が精神的な安らぎを感じられるような深い愛情のこと(3)	3.4%
3.人を受容すること(9)	10.1%
・人がありのままの自分を出せるように、その人が気を許せる雰囲気を作ること(4)	4.5%
・人を受容してあげること(3)	3.4%
・寛大な気持ちで人を受けとめること(2)	2.2%
4.人がどんなことを言っても、どんな行動をしても全部許してしまうこと(4)	4.5%
5.人に対して過保護であること(5)	5.6%
・人が自分一人の力で解決できる事や、一人でしなくてはいけない事を代わりにしてあげること(3)	3.4%
・人にものお金を与えすぎること(2)	2.2%
6.自分が、あるいは、自分に好意を持つ人の願いを寛大に聞き入れること(4)	4.5%
・無理な願いでも、自分を信頼してくれば寛大な気持ちで願いを聞くこと(2)	2.2%
・自分が好きな人の頼みを、「しょうがないなあ」と思いながら、つい受け入れてしまうこと(2)	2.2%
7.人を守ること(4)	4.5%
8.人を放任すること(6)	6.7%
・人がやってはいけない事を行っているのを注意せずに容認すること(2)	2.2%
・自分勝手にさせること(4)	4.5%
9.人の言動を許すこと(4)	4.5%
10.人の頼みを聞いてあげること(3)	3.4%
3. 態度や行動への評価(6)	6.7%
人が自立しよう、努力しようという気持ちを奪うこと(6)	6.7%
・人が自立しようとする気持ちを失わせること(4)	4.5%
・人が努力しようとする気持ちを失わせたり、生きていく上で必要な行動をできなくする恐れのある行為のこと(2)	2.2%

注：回答者数、89名（男27名；女62名）；カッコ内の数字は、回答者数；総度数88パーセンテージ(%)は、回答者数全体における回答者数の割合

答；一人平均 1.35 個)、「甘えさせる」が 129 個 (89 名が回答；平均 1.45 個) であった。

次にこれらのコードは、意味的な類似性を基にカテゴリとしてまとめられた。まず、調査者によってすべての回答がカテゴリ化され、その後、実験協力者はそれが妥当であるかをチェックした。このカテゴリ化の手続きにより、カテゴリ数は、「甘え」が 64 個、「甘える」が 68 個、「甘えさせる」が 62 個になった。なお、「甘え」と「甘える」に共通のカテゴリの数は 14 個であった。

Table 2, 3, 4 は、各素朴概念において二名以上が回答したカテゴリを示している。調査者は、結果をわかりやすくする目的で、意味的に類似していると考えられるカテゴリを組み合わせ、上位カテゴリを作成した。この上位のカテゴリ化の手続きにより、上位カテゴリの数は、「甘え」17 個、「甘える」13 個、「甘えさせる」12 個になった。

考 察

1. 「甘え」・「甘える」の素朴概念

一般人は、「甘え」、「甘える」を、心理学者と同様、対人欲求、ある種のコミュニケーションの仕方として捉えているようである (Table 2, 3 参照)。また、心理学者の中には感情経験としての甘えを強調している者もいたが (cf. 土居, 1981)、一般人は対人欲求面より、ある種のコミュニケーションの仕方の特徴に注目していることが分かった (「甘え」では、全被験者中 20.6% が対人欲求面、62.9% がある種のコミュニケーションの仕方、甘えるでは、全被験者中 7.9% が対人欲求面、69.5% がある種のコミュニケーションの仕方を回答)。

それぞれの概念における上位カテゴリは次の通りである。「甘え」において、最も回答頻度が高かった上位カテゴリは、ある種のコミュニケーションの仕方を指していると思われる「怠惰であること」(16.5%) である。次に続くのが、「自分がしたいことでなければ人に頼ること」(10.3%)、「物事への取り組みや対人態度が甘いこと」(8.2%)、「自己開示」(8.2%) である。一方、甘えるにおいて最も回答頻度の頻度が高かった上位カテゴリは、「わがままを言う・わがままに振る舞うこと」(23.2%) である。次に続くのが、ある種のコミュニケーションの仕方に含まれる「自分がしたいことでなければ人に頼ること」(12.6%)、「人に頼ること」(11.6%) である。このように、「甘え」の素朴概念と「甘える」の素朴概念の間で類似した回答が多く見られるものの、その特徴が報告される頻度には差が見られた。また、「甘え」の素朴概念で最も回答頻度が高かった上位カテゴリである「怠惰であること」(16.5%) は、「甘える」では見られなかった。これまでの理論的研究では、「甘え」と「甘える」があまり区別されずに混在して用いられてき

ているが、もしかすると一般人は、潜在的に二つの言葉を使い分けて用いている可能性があるかもしれない。

「甘え」、「甘える」の素朴概念のカテゴリと心理学者による「甘え」、「甘える」の概念規定との相違は何であろうか。まず、素朴概念の上位カテゴリには、「人に依存すること」(甘え：4.1%)、「人に頼りすぎる気持ち」(甘える：5.3%)、「人を頼りにする気持ちが強いこと」(甘え：2.1%)、「わがままを言う・わがままに振る舞うこと」(甘え：5.2%、甘える：23.2%) が含まれていた。これは、心理学者の概念規定の「相手に依存したいという欲求」(土居, 1956)、「自己中心的な要求を受け入れて欲しいという期待・願望 (Okonogi, 1992)」、「相手を利用して自分の欲求の満足や願望の実現をはかること」(土居, 1965) に近いように思われる。

また、素朴概念の上位カテゴリには、「自己開示をすること」(甘え：8.2%、甘える：4.2%) が含まれていたが、これは心理学者の概念規定の「欠点や弱みも含めありのままの自分を受け入れて欲しいという欲求、願望」(手塚, 1993；山口, 1999) と近いように思われる。

最後に、素朴概念の上位カテゴリには、「人から愛情を受けようとする事」(甘え：4.1%)、「かわいがってもらったり、やさしくしてもらおうこと」(甘える：3.2%) が含まれていたが、これは心理学者の概念規定の「愛情を受けようとする事」(土居, 1965；小此木, 1969 他) に近いように思われる。

以上のように、素朴概念の多くは心理学者の概念規定と類似していたが、一方で違いも見られた。まず、素朴概念の上位カテゴリには、「自分に甘いこと」(甘え：6.2%) とか、「自分の言動や自分の立場に無責任であること」(甘え：2.1%、甘える 2.1%) が含まれていたが、これは心理学者の概念規定にはないものである。次に、心理学者が甘えの概念規定に、「愛情を示すこと」(土居, 1971；竹友, 1988) や「愛情を確認すること」(西平, 1982) を含める一方で、素朴概念ではそれが見られなかった。このように、素朴概念と心理学者の概念規定は必ずしも一致しておらず、既存の理論的アプローチでは、素朴概念の幅を捕まえていないように思われる。

それでは、本調査と先行研究との相違は何であろうか。Kato (1995) は、被験者に依存の特徴との違いを入れて甘えの特徴を記述するように求めた。彼の調査で見られた結果は、本調査の結果と重なるものが多い (例えば依存する、援助を求める、サポートを求めるなど)。そして、本調査でしか見られない結果は、「自分に甘い」や「依存する」などである。しかしながら、本調査での結果と Kato の結果を単純に比較するのは難しい。というのは、研究の目的が必ずしも同じでなく、分析の手続きも異なっているからである。まず、Kato の分析は、甘えの要素を取り出すことであったため、最小の要素でコード化を行っ

ている。例えば、本調査で一つのコードとして扱われた「自分一人ですることでも人に頼ること」は、「自分一人でするとき」(状況)と「頼ること」(内容)というように別々の特徴として扱われる。次に、Katoの調査ではそれぞれの要素同士の結びつきの頻度は計算されていない。したがって、Katoの調査では、「甘え」の特徴としてどれがもっとも典型的なものなのかが明らかにされていない。

2. “甘えさせる”の素朴概念

一般人は、「甘えさせる」を、「甘え」、「甘える」と同様、対人欲求、ある種のコミュニケーションの仕方、対人態度への評価として捉えているようである (Table 4 参照)。「甘えさせる」の素朴概念において、最も回答頻度が高かった上位カテゴリーはある種のコミュニケーションの仕方に含まれる「人の願いを何でも聞き入れること」(20.2%)と「人に精神的サポートを与えること」(20.2%)である。次に続くのが、「人を受容すること」(10.1%)、「人に自分を頼りにして欲しいと思うこと」(7.9%)である。

「甘えさせる」の素朴概念のカテゴリーと心理学者の考える「甘えさせる」との相違は何であろうか。まず、素朴概念の上位カテゴリーには、「人に精神的サポートを与えること」(20.2%)、「人を受容すること」(10.1%)が含まれていたが、これは、心理学者の概念規定の「相手の傷ついた心を癒すこと」、「相手に憩いの場を提供すること」(原ら, 1974; Kato, 1995)に近いように思われる。

しかし、素朴概念の上位カテゴリーには、「人の願いを何でも聞き入れること」(20.2%)とか、「人を放任すること」(6.7%)、「人に対して過保護であること」(5.6%)などが含まれていたが、これは心理学者の概念規定にはないものである。また、心理学者が「甘えさせる」の概念規定に「自分の甘えの欲求を代償的に満足させること」、「人間関係を滑らかにすること」(原ら, 1974; Kato, 1995)を含める一方で、それは素朴概念では見られなかった。このように、一般人は、「甘えさせる」を、心理学者が捉えるより幅広い概念として認識しており、「甘えさせる」に「甘やかす」の意味も含めているのではないかと思われる。

まとめ

本調査で得られた主な結果をまとめると以下の通りである。

①「甘え」、「甘える」の素朴概念では、心理学者の概念規定と類似した特徴が多く見られたが、違いも見られた。素朴概念には、これまでの心理学者の概念規定では見られない「自分に甘いこと」(「甘え」の素朴概念のみ)とか、「自分の言動や自分の立場に無責任であるこ

と」などが含まれていた。また、心理学者の概念規定には、「相手との親密さを保つため、または相手を喜ばせたり満足感を与えるため、愛情や信頼を示すこと」や「相手の愛情を確認すること」があったが、素朴概念では見られなかった。

②「甘え」の素朴概念と「甘える」の素朴概念の特徴には類似したものが多いが、一方で、その特徴が報告される頻度に差が見られた。また、「甘え」の素朴概念において、回答者数全体における回答の割合が最も高かった「怠惰であること」(16.5%)が、「甘える」の素朴概念では見られなかった。

③「甘えさせる」の素朴概念には、相手に精神的安らぎを与える受容や、サポートを与えるといった特徴が含まれており、心理学者の概念規定と類似していた。しかし、これまで心理学者の概念規定では指摘されなかった、過保護や放任といった特徴がみられた。

なお本調査では、「甘え」、「甘える」、「甘えさせる」に関する一般的な素朴概念について調査したが、日常場面では甘える対象の違いでそれらが異なっている可能性がある。対象を限定した場合(母親との甘え等)、本調査の結果とは異なる特徴や属性を含む素朴概念なのか、あるいはそれが本調査の結果とは異なる概念構造をしているか、さらに検討する必要があるだろう。

引用文献

- 土居健郎 1956 精神分析 現代心理学体系 10巻 共立出版
 土居健郎 1967 精神分析 創元社 創元医学新書
 土居健郎 1960 「自分」と「甘え」の精神病理 精神神経学雑誌, 62, 149-162.
 土居健郎 1965 精神分析と精神病理 医学書院
 土居健郎 1968 「甘え」理論をめぐって 精神分析研究, 14(3), 14-19.
 土居健郎 1971 「甘え」の構造 弘文堂
 土居健郎 1981 「甘え」の構造 第2版 弘文堂 弘文堂選書
 Fehr, B., & Russell, J. A. 1991 The concept of love viewed from a prototype perspective. *Journal of Experimental Psychology : General*, 113, 464-486.
 Fehr, B. 1994 Prototype-based assessment of layperson's view of love. *Personal Relationships*, 1, 309-331.
 原ひろ子・我妻洋 1974 しつけ 高文堂
 菅野 純 1982 甘えっ子の教育相談 児童心理, 36(5), 871-877.
 Kato, K. 1995 *Empirical studies of amae interactions in Japanese and American adults: Constructing relational models and testing the hypothesis of universality*. (UMI

- Microform 9542870, Ann Arbor, MI: UMI Company).
- 木村 敏 1972 人と人之間 弘文堂
- Markus, H.R. & Kitayama, S. 1991 Culture and the self : Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.
- Morshbach, H., & Tyler, W. J. 1986 A Japanese emotion : Amae. In R. Harre (Ed.), *The social construction of emotions*. Oxford: Basil Blackwell. Pp.289-307.
- 長山恵一 1997 「甘え」現象の基本的構成と特性に関する考察 — 甘え理論 (土居健郎) の明確化を通して —, *精神神経学誌*, **99**(7), 443-485.
- 長山恵一 1999 「甘え」概念の相対化を求めて — 土居健郎氏の討論を読んで —, *精神神経学誌*, **101**(1), 51-59.
- 西平直喜 1982 甘えの心理学 *児童心理* **36**(5) 745-759
- 岡野憲一郎 1999 甘えと「純粋な愛」という幻想 北山修 (編) *日本語臨床3 「甘え」について考える* 聖和書店 Pp.219-238.
- 小此木圭吾 1968 甘え理論 (土居) の主体的背景と理論構成上の問題点 *精神分析研究*, **14**(3), 14-19.
- Okonogi, K. 1992 AMAE AS SEEN IN DIVERSE INTERPERSONAL INTERACTIONS. *INFANT MENTAL HEALTH JOURNAL*, **13**(1), 18-25.
- 坂本洲子 1997 子どもを甘やかす親 — どんな子どもに育つか *児童心理*, **51**(13), 38-43.
- Shaver, P., Schwartz, J., Kirson, D., & O'Connor, C. 1987 Emotion and emotion knowledge: Further explorations of a prototype approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 1061-1086.
- 杉本良夫・ロス=マオア 1982 日本人は「日本」的か 特殊論を越え多元的分析へ 東洋経済新報社
- 竹友安彦 1988 メタ言語としての「甘え」 *思想*, **768**, 123-155.
- 竹友安彦 1989 「甘え」をめぐる一つの対決と、そのメタ言語的考察 — 土居健郎氏に答える *思想*, **779**, 27-32.
- 竹友安彦 1999 「対人行動的甘え」と「精神的甘え」 — 日常語「甘え」の延長にある精神分析述語「甘え」の問題 — 北山 修 (編) *日本語臨床3 「甘え」について考える* 聖和書店 Pp.47-64.
- 手塚千鶴子 1993 「甘え」から見た日本人のコミュニケーションと異文化接触 *異文化コミュニケーション*, **6**, 21-49.
- 山口 勲 1999 日常語としての「甘え」から考える 北山修 (編) *日本語臨床3 「甘え」について考える* 聖和書店 Pp.31-46.

付 記

本論文は、第1著者が九州大学大学院人間環境学研究科に1999年度修士論文として提出した論文の一部に加筆・修正を行ったもので、2000年11月の九州心理学会第61回大会(九州大学)で発表を行っている。本研究は、科学研究費補助金 <FONTFAMILY> 基盤研究 (C-2) 一般 (代表者: 加藤和生, 平成12年度~平成13年度, 課題番号: 11610126) の援助にもとづいて行われた。論文を作成するにあたって、貴重なコメントをいただいた丸野俊一先生、遠藤利彦先生、北山修先生、久米弘先生に深く感謝いたします。